

図書館だより

vol.33
No.2

Bulletin of the Hokkai-Gakuen University Library

北海学園大学附属図書館報 第33巻2号(通巻198号) 2011.7.13



画・川田裕之

CONTENTS

フィンランドの図書館 小野丘 2

佐藤大輔 中根研一

私が薦めるこの1冊 3

図書館レポート2011 4

ドン・キホーテ教授かく語りき 小島康次 6

イチオシ! データベース紹介! 学外利用編 7

アルバイトーク/編集後記 8

フィンランドの図書館

文＝小野 丘

(おの たかし／工学部教授)



2010年4月から一年間、フィンランドの大学に滞在する機会を得ました。ここでは現地の図書館について紹介したいと思います。

1. 国立図書館

フィンランドの国立図書館は、1841年に開館したということです。蔵書数は約300万冊、迷路のような新旧の建物は8層構造でした。館内を案内する英語のガイドツアーがありました。入館は自由で、荷物はロッカーに入れて、必要なものは「手提げかご」の中に入れて館内を持ち歩きます。基本的に開架のようであり、自動貸出機がありました。年鑑はすべてオンライン管理されており、複写により損傷する恐れのある雑誌のために管理人のいる複写室がありました。マイクロフィルム読取機は12台以上。PCの持ち込みも自由のようでした。米国の資金と大使館の管理によるAmerican Referenceがあったのが印象に残りました。

2. ヘルシンキ市立図書館

フィンランドで一番大きい市立図書館がヘルシンキにあります。入館は自由で、第一印象は「居心地が良い」でした。高い吹き抜けのガラス張りの天井から入る日差しで館内がとても明るく、また、驚いたことにその下に「池」が配置してあって、それが柔らかい雰囲気を与えていました。まるで書店のように本が平台に展示されており、本棚はどこも余裕があつて、本棚の中で表紙を見せて展示されている本も多くありました。また、棚の内側の色が白いので、それも明るさを助けているようでした。多数のPCが設置されており、また、持ち込みも自由なようで、椅子と机と電源が豊富に用意されて



ヘルシンキ市立図書館の池

に用意されていました。多言語の本も多く、日本語の本は棚二つほどありました。子供用の背の低い本棚も隔離されずに配

置されており、専用の低いカウンターや検索用PCが用意されていました。自動貸出機もありました。2階にはカフェもあり、年齢性別によらず来ることが楽しい空間で、多数の利用者を見かけました。

3. 大学図書館

ヘルシンキの隣のエスボーに今回滞在したアールト大学（元のヘルシンキ工科大学）があります。その図書館も内部はとても明るく感じました。壁で仕切られた広い閲覧室で学生がPCを前に勉強していました。係員はいますが、学生は自分で自動貸出機と返却機を操作していました。蔵書はさほど多くありませんでしたが、おそらく各学部にもある図書室に図書が分散しているものと思われます。私がいた学部の建物にも図書室があり、専門書、専門雑誌、学位論文など通り



アールト大学図書館の閲覧室

の情報は十分そろっている印象を受けました。また、どちらも夜遅くまで開館していて、いつも学生で一杯でした。

ヘルシンキ市内にはヘルシンキ大学があり、その図書館も出入りが自由です。講義棟内の一角の3階分を図書館としているような作りで、外からは分かりづらいところがありました。内部は狭かったのですが蔵書でぎっしり埋まっていました。勉強部屋という感じの仕切られた閲覧室があり、PCの持ち込みは自由なようでした。閲覧室以外の空間にも机と椅子がたくさん並べてあり、そこもほとんどが利用されていました。

全体の印象として、国立図書館は利用者にかかれており、公共図書館は市民の社交場としての役割をなしており、大学図書館は学生に十分な情報と静穏な勉強の場を提供している、と感じました。異なる図書館には異なる目的を持った人が来るはずです。それぞれの図書館では、そこに来る人が一番使いやすいように工夫されていることに感心しました。

私が薦める
この1冊

M.ポランニー著（高橋勇夫訳）
『暗黙知の次元』（ちくま学芸文庫、2003年）

文＝佐藤大輔

（さとう だいすけ／経営学部准教授）

この国や私たち日本人全体を覆っているムードというか雰囲気、少し違和感のあるものだと感じているのは私だけだろうか。バブル崩壊以降、かなり長らく日本経済は元気がないし、政治は混迷が続いている。雇用は減少し、自殺者は増える一方で、なによりも多くの人たちが現状の日本が幸せな状態だとあまり感じていないように思われる。それにも関わらず私たちは具体的にどうすればいいのか、どうしたいのかアイディアを出せないでいるといえるのではないか。

このような状況を生み出す一因かも知れないと私が感じているのが、私たちの人生や日常生活における実感の喪失である。私たちは、目先の具体的かつ短期的・表面的な取り組みには一生懸命になりやすいが、抽象的かつ長期的・本質的な取り組みにはなかなか踏み出しにくい。このような近視眼が生じる原因は、おそらく起こった事象に対して意味を探し出し、自分な

りの地に足をつけた理解と経験を通じて実感を求めようとしただけでなく、実感とは別にやるべきことだと言葉上は知っている、理解しているだけで満足してしまうことによると考えられる。つまり、やるべきだと知っていても、やりたいとは思っていないのである。やるべきだと知っているし理解しているにもかかわらず、やるべきだと「分かって」はいないのだ！

このような実感について科学論の分野で言及しているのがM.ポランニー「暗黙知の次元」だ。彼は言語などのような知識とは異なる暗黙知と呼ばれる知識への注目を促している。この本は、大学生や研究者として大学に関わる多くの人に、自分が関わる科学というものがどういうものなのかを再考するためにも役立つ書なのではないか、と私は感じている。抽象的ではあるが、短くコンパクトに内容がまとまった本なので、是非一度読んでみてほしい。

私が薦める
この1冊

高野秀行著
『幻獣ムベンベを追え』（集英社文庫、2003年）

文＝中根研一

（なかね けんいち／法学部准教授）

若いうちにしかできない「バカな冒険」（贅辞です）がある。本書は、1988年にアフリカはコンゴのテレ湖に棲むといわれる伝説の怪獣「モケーレ・ムベンベ」探しに挑んだ早稲田大学探検部の学生たちの記録だ。

周囲に笑われ、呆れられながらも、思い立ったらどこまでも。恐ろしいまでに情熱的な行動力で目標へ向かっていく。インターネットなんぞない時代、少ない現地の情報を得るためにフランス語書籍を取り寄せたり、恐竜実在の可能性について調べるために博物館の専門家や大学の先生を訪ね歩いたり、事前準備も怠りない。現地の公用語であるフランス語の学習だけでは飽き足らず、コンゴ人留学生を捕まえてリンガラ語（現地で広く使われている口語）の手ほどきを頼み込む。さらにはあの手この手でス

ボンサーを見つけ、各種機材も調達。様々な困難を乗り越えて、コンゴへ飛ぶ。

全編口マンあふれる冒険譚だが、彼らは決して怪獣の実在を盲信しているわけではない。現地取材で得た目撃談を冷静に分析し、慎重にその正体を考察している。私は高校時代、彼ら大学生の探検を新聞で知って驚嘆した者のひとりだ。後年の自分の探検取材活動も、彼らの影響によるところが大きい。

現在は廉価な文庫版が手に入る。この夏、遠いジャングルに思いを馳せ、ふた昔以上前の大学生たちの探検を追体験するのも、悪くないだろう。

探検部のリーダーだった高野秀行氏は、現在も「辺境作家」として活躍中。数々の愉快的探検記を書かれているので、そちらもお薦めである。

図書館レポート

Library Report

2011

ーレファレンス・サービス関係統計ー

●学内レファレンス業務

	教職員	(前年度対比)	学 生	(前年度対比)	その他	合 計	(前年度対比)
文献所蔵調査	18	-8	15	-35	1	34	-46
事 項 調 査	2	+2	14	+14	1	17	+16
利 用 指 導	17	+17	73	+70	3	93	+90
そ の 他	2	+2	0	±0	0	2	+2
合 計	39	+13	102	+49	5	146	+62

●相互協力業務

1. 複写

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	557	+54	0	-2	557	+52
受 付	1,954	+572	0	±0	1,954	+572
合 計	2,511	+626	0	-2	2,511	+624

2. 貸借

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	102	-32	2	+2	104	-30
受 付	478	+144	0	±0	478	+144
合 計	580	+112	2	+2	582	+114

3. 文献所蔵調査

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	4	+1	0	±0	4	+1
受 付	15	+1	0	±0	15	+1
合 計	19	+2	0	±0	19	+2

4. 他館への利用願

	国 内	前年度対比	国 外	前年度対比	合 計	前年度対比
依 頼	23	-50	0	±0	23	-50
受 付	29	-4	0	±0	29	-4
合 計	52	-54	0	±0	52	-54

一カウンター・サービス関係統計一

	2008年度	2009年度	2010年度
入館者数	349,663人 (1日当り 1,253人)	393,124人 (1日当り 1,384人)	366,307人 (1日当り 1,280人)
貸出者数	延べ31,877人 (うち学生 28,612人)	延べ29,728人 (うち学生 24,287人)	延べ31,434人 (うち学生 28,538人)
学生一人当りの貸出回数	3.2回	2.7回	3.2回
貸出冊数	59,477冊 (うち学生 52,432冊)	52,577冊 (うち学生 40,627冊)	56,577冊 (うち学生 49,862冊)
学生一人当りの貸出冊数	5.8冊	4.5冊	5.7冊
PC ブース利用者数	延べ 3,408人	延べ 2,503人	延べ 1,742人
AV ブース利用者数	延べ 5,069人	延べ 4,577人	延べ 4,691人

平成23年3月時点在籍者数:8,674名

開館日数:286日

※本館と工学部で開館日数が異なるが、入館者数の1日当りの入館者数は、
本館と工学部の入館者総数を本館の開館日数で割ることで計算することとする。



異文化間 ディスコミュニケーション論の すすめ (その1)

●図書館長 小島康次



まず、自己紹介から。このコラムで私は“ドン・キホーテ”というペンネームを使うことにする。ドン・キホーテといえば騎士道物語のパロディ『ドン・キホーテ』（原題「才知あふれるラ・マンチャの郷士ドン・キホーテ」）に出てくる誇大妄想狂、つまり頭のヘンなオジサンというのが一般的なイメージかもしれない。しかし、『ドン・キホーテ』こそ、中世の荒唐無稽な騎士道物語に引導を渡し、近代文学の端緒を開いた記念すべき作品であり、主人公は空想と現実の区別を脱構築しつつ狂気を演じている。こんな主人公ドン・キホーテの自由自在にあやかりたいものである。

ナンバ歩きという日本人が古来行っていたらしい歩き方があるのをご存知だろうか。現在、我々は手と足を交互に繰り出して歩く歩き方を標準的なものとして何の疑いも持たない。けれども、この歩き方は明治以降、西欧の近代文明が入ってきた後に、他の輸入文物と同様、西洋流を真似たものであるらしい。江戸時代までの歩き方が今と違っていたとしても、わずか150年ほど前のこと、記録があるはずだと誰しも思う。ところが当時はまだビデオも映写機もない時代である。我々の先祖がどんな歩き方をしていたかを正確に知る術はない。わずかに伝統芸能である能や歌舞伎の所作の中にその一端を垣間見ることができるくらいである。そうしてみると確かに能でも歌舞伎でも登場人物の歩き方は腕を腰のあたりに軽く添えるようにしているだけで両手を足と交差させて交互に大きく振るという動作は見られない。

ある文化の中で当然のごとく人々に受け入れられている習慣や考え方というのはそこにいと不可視となる。当たり前過ぎてそのことを表す言葉すら存在しない。ナンバ歩きは典型的な事例であろう。明

治以降、西洋の軍隊式の歩き方が入ってくるまで、歩き方とはナンバ歩きのことだということを疑う者はいなかった。だから記録も存在しない。

同様のことが実は数多くある。明治の文豪達が初めて近代文学に接して衝撃を受け、文学作品の主題としたのは「近代的自我」というそれまでの日本人には無縁の精神構造だった。文芸評論家江藤淳は『成熟と喪失―“母”の崩壊―』の末尾に、評論としては異例の後書きにあたる「著者から読者へ」というメッセージを敢えて付した。そのタイトルもまた「説明にくい一つの感覚」というやや異例のものである。ナンバ歩きから近代的歩行への変化の場合と違って、それまでの日本人の精神構造には存在しなかった「近代的自我」が成立するためには土台となる「個の自立」（江藤はこれを「人は孤独であることが許されている、という感覚」と表現する）が必須であるとする。にもかかわらず、それが困難であるのは日本人の伝統的な心性である母性原理が深く根を張っているからだとされる。『成熟と喪失―“母”の崩壊―』はそうした個の自立を妨げる母性が近代化の中で崩壊し、喪失していきながら、なお“土台”を持たない日本社会においては個が成熟し自立することがない、というやや悲観的な筆致である。

しかし、これは決して文学作品の中だけの話ではない。日本を代表する二人の深層心理学者（ともに故人）が互いに独立に、母性原理による個の自立の困難に関する自説を長期にわたって展開しているのである。一人は精神分析（フロイト）の小此木啓吾であり、もう一人は分析心理学（ユング）の河合隼雄である。このコラムでは、この二人の説を参照しながら異文化間におけるコミュニケーションの難しさによって照らし出される精神性について考えてみたい。

自宅から電子情報サービスを活用しよう！

北海学園大学附属図書館のHPからご利用頂ける電子情報サービスが、自宅からでも利用できるようになりました。

今までは、大学に来ないとデータベースが使えませんでした。

がしかし、

今度から自宅（PCでインターネットを利用できる環境が必要）から新聞データベースや辞書・事典類、雑誌記事の検索ができますので、レポート・論文の作成を自宅で行う時に非常に役立ちます。

そのほかにも日常のふとした疑問が湧いたときの調べもののツールとして非常に便利です。是非ともお役立てください。

[図書館HP]

はじめに

学外から電子情報サービスを利用する方法

自宅など学外からデータベースや電子ジャーナルを利用する場合は、下記の方法でログインしてからご利用ください。
(対象: 本学専任の教職員・学生)

1事前設定

2ログイン方法

3ログアウト方法

ここからログイン！

利用手順

最初に「？」をクリックし、利用手順をご覧ください。

※PC端末の設定変更が必要になります。

上図の「学外から電子情報サービスを利用される方はこちら」を選択し、ログインします。

ログイン完了画面が開いたら、もう一度北海学園大学附属図書館HPを開き、電子情報サービスから閲覧したいデータベースを選択し利用してください。

※ID・PWが求められるデータベースは学外から利用できません。

利用資格

G-PLUSのログインID・PWをお持ちの方（本学学生・大学院生・教職員）

*** 注意 ***

学内で「学外から電子情報サービスを利用される方はこちら」を選択してもエラー画面が表示されます。こちらを利用する場合は学外からの利用となります。

大学生生活を透して

文＝ 澁谷直隆

(しぶや なおたか)

大学院工学研究科 修士課程1年

日に日に日差しも強まり、様々なものに活気があふれる季節になりました。体育系のサークル活動も本格的なシーズンを迎え一層の活躍をされることでしょう。

一年生の皆さんは大学生活に慣れることができているでしょうか？

私は去年卒業し大学院に進学しました、今回は私がこの四年間で感じた大学生活についてお話させていただきます。

私は大学生活での「勉強する」、「サークル活動に励む」、「アルバイトをする」等の様々な経験は世の中を見通すレンズのようなものだと思っています。

例えば、この大学で四年間土木工学を勉強した私には何気ない登校中に見える景色も、道路、橋梁、堤

防など様々な構造物の溢れる風景に変えました。これはどの学問においてもいえるのではないのでしょうか？

皆さんも四年間の中での経験や学習を経て見る物事への知識が有るか無いかではその見え方は大きく変わっていくでしょう。上級生の方も一年生の頃見えていた景色を改めて思い起こせば、いま目の前に広がる風景との違いを感じるのではないのでしょうか？

この北海学園大学で皆さんが手に入れるレンズは日本に留まらず世界を見渡す望遠鏡にも、自分の専門性を極める顕微鏡にもなると思います。何事にも悔いが残らないように自分らしい大学生活をおくり、自分だけのレンズを存分に磨いていってください。

編集後記

皆さん、毎日楽しく、忙しく過ごしていますか？

毎日の授業・サークル・バイト・コンパ・デートに加え、夏休みになれば旅行・海水浴・ドライブなどイベント満載の日々を送るのかな？

自由な時間を大勢でワイワイ盛り上がって気分上々になるのも捨てがたいですが、誰にも気兼ねせずリラックスした時間を過ごすのはいかがですか？

「独り」でお気に入りの場所にでかけたり、自室を自分好みに改装し寛いだり、そこでゆっくりお茶を飲んだり、読書したり、考えたり、ボーっとしたり、自分のためだけに時間・空間を使ってみる。

個人的意見ですが、「独り」の開放感…堪りません。

図書館には皆さんの「独り」を応援するアイテムがたくさんあります。

専門図書や小説はもちろん、「部屋づくり」の本や「コーヒー」の本も所蔵しています。

それらを活用にして「独り」をどんどん快適にし、満喫してみましょう。

あつ、くれぐれも「ひとり上手」になり過ぎないように！何事も「ほどほど」が肝心、時々「ちょっと寂しいかも…」と思うぐらいが良いのです。

まずは皆さん、定期試験を頑張って、素敵な夏休みを迎えてください。